



「帯西イエロー」の心から感じたこと

春休み中も、本校正門にそびえるクスノキは、落ち葉をどんどん落とし、正門周辺が落ち葉だらけとなっていました。朝から出勤した職員一人一人が箒を手に、毎日毎日落ち葉掃きをしていました。

始業式当日の朝、正門周辺に目をやると、職員と6年生の子供たちとが箒を手に落ち葉掃きをしていました。職員や子供たちは帯西イエロー「社会をつくる心」で汗を流してくれました。



そして、ここには「師弟同行」の姿がありました。私は中学校時代に「していどうこう」と覚えていたのですが、大学時代に、「どうぎょう」と読むのだと友達に指摘され、間違いに気付きました。

よく考えてみると、弟子は随行であるべきで同行(どうこう)ではないはずです。「同じ行」の中で、師は弟子に教えながら、自らより深いところで学びを得ることが必要となってきます。師と弟子が共に学び合っていく姿が、これからの学校づくりには欠かせないのだと思います。

「学ぶ」の語源は「真似ぶ(まねぶ)」といわれます(他にも説がある)。学ぶということは真似るということであり、弟子は師から「真似び」、師は弟子に教えながら、自らより深く学び続けていく必要があるのです。

子供たちには、この帯山西小学校での学びが、いつか大人になったときに誇らしく思ってもらえるように、我々も子供と共に学び続けたいと思います。そのためにも「子弟同行」に終わりはありません。

ムラサキ 咲いています

「ムラサキの優しき姿 天駆ける 鷹の雄心」これは、本校の校歌の一節です。このムラサキの根の色素は、古代に冠位や服色の制度が定められて以降、紫色の染料として使われていました。最も高貴な人の衣服などの色とされ、一般の使用は禁じられたそうです。「枕草子」には、「すべて何も何も、紫なるものは、めでたくこそあれ。花も糸も紙も」とあります。このように、ムラサキとは、古くから日本人に愛されてきた花だそうです。可憐な白い花を咲かせ、根のシコンという成分は、生薬としても利用され、栽培もされてきました。かつては北海道から九州まで、日本全土の日当たりのよい草地に分布していたのですが、種の発芽率が低い上、ウイルスなどに弱いため絶滅危惧種に指定されています。



そんな貴重なムラサキが緑化委員会の一人一鉢によって、元気に育っています。学校によられた際は、職員玄関先にムラサキの鉢が置いてありますので、ぜひご覧ください。